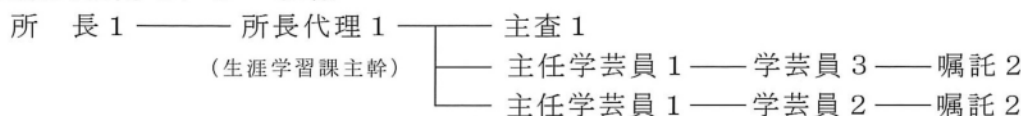


- 宮野秋彦・西尾信廣・堀沢祐一 2004,3 「北代縄文広場竪穴住居の修繕について」『富山市考古資料館報』No.41
- 小黒智久 2004,3 「富山市呉羽三ツ塚古墳試掘確認調査速報」『富山市考古資料館報』No.41
- 加藤達行・古川知明 2004,3 「中世富山城の考古学的調査速報」『富山史壇』第142号 越中史壇会
- 藤田富士夫 2004,3 「大伴家持の歌に見る渡河地点について」『富山市の遺跡物語5』
- 加藤達行 2004,3 「富山城の破却について」『富山市の遺跡物語5』
- 野垣好史 2004,3 「開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡出土のナイフ形石器」『富山市の遺跡物語5』
- 古川知明 2004,3 「富山城本丸採集の瓦について」『富山市の遺跡物語5』
- 補足 (2002.11～2003.3)
- 湯原勝美 2002,11 「雙六盤の変遷について」『遊戯史研究』第14号 遊戯史学会
- 山崎美和 2003,2 「律令国家における越」『富山史壇』第139号 越中史壇会
- 森沢佐歳 2003,3 「富山市北代中尾遺跡出土骨について」『富山市考古資料館報』No.40
- 小黒智久 2003,3 「越中東部地域における初期須恵器」『富山市考古資料館報』No.40
- 小林高範 2003,3 「富山市金屋南遺跡から出土した銅製品について」『富山市考古資料館報』No.40

7 発掘調査報告書等(2003年度)

- 133 富山市長岡八町遺跡発掘調査報告書
- 134 富山市北代加茂下Ⅲ遺跡発掘調査報告書
- 135 富山市開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅱ発掘調査報告書
- 136 富山市開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書
- 137 富山城跡試掘確認調査報告書
- 138 富山市打出遺跡発掘調査報告書
- 「奈良時代の富山を探る」フォーラム記録集

8 埋蔵文化財センター組織



事業費

- ①埋蔵文化財調査費 178,430千円
発掘調査5遺跡、出土品整理2遺跡、市内試掘確認調査、市内出土品整理
- ②体制整備・一般管理費 13,860千円
- ③普及活動費 300千円
「奈良時代の富山を探る」フォーラム記録集刊行、発掘速報展開催
- ④遺跡・史跡保護管理費 8,405千円
北代縄文広場管理、北代縄文広場復元建物修理

研究余話Ⅳ

富山城本丸採集の瓦について

古川 知明

(埋蔵文化財センター主任学芸員)

ここに紹介する資料は、1988(昭和63)年10月に故林寺厳州氏(小杉町)が富山城本丸東側の石垣付近において採集された瓦である。城址公園内には現在でも多くの瓦が散布する。それらを採集分析した報告〔斉藤ほか1996〕では明治以降の建築物の瓦とわかった。

また西井龍儀氏により本丸において採集された江戸初期とみられる軒平瓦の報告がある〔西井2001〕。この報文中に林寺氏採集の丸瓦についても触れられており、軒平瓦と合わせて慶長14(1609)年本丸大火以前の可能性があることが指摘された。ここでは富山城最古の瓦として位置づけられるかもしれない丸瓦等林寺資料を中心に報告する。

林寺氏の資料5点はいずれも表面が黒灰色～暗灰色を呈するいぶし瓦で、いぶしに光沢はほとんど認められない。胎土に砂粒を多く含み、焼きはやや軟質である。丸瓦4点と平瓦1点があるが、いずれも瓦当面が認められず軒先瓦であるかどうかは不明である。

丸瓦（1～3） いずれも玉縁付近の破片で、西井氏により「凸面に布目痕をもち、縦にヘラ削りを加えた特徴的な瓦」〔西井前掲〕とされた一群である。

1は、厚さ1.9cm～2.5cm、復元幅13cmを測る。凸面は1cm当り経糸10本緯糸10本の粗い布目痕の上から玉縁辺りに縦方向のハケメ（1cm当り6本の粗いもの）を施し、全体に縦方向（玉縁から先端方向）のミガキを行う。ミガキの幅は1.2～1.5cmで一定している。なおこのミガキ手法は、ゆっくりヘラ状工具を押し付けながら丹念に器面を整えるもので、砂粒の移動は顕著ではない。光沢を帯びる部分も認められる。このような手法は西井氏のいう「ヘラナデ」〔西井前掲〕に相当しよう。

凹面は縦方向（先端から玉縁方向）のケズリが施され、通常凹面器面に残るコビキ痕、布目痕、縄痕、タタキ痕等はすべて削り取られている。長側端面は縦方向（先端から玉縁方向）のミガキを行う。玉縁部は内傾し、上原真人氏の分類Ⅳ〔上原1984〕にあたる。胎土には石英粒を多く含む。

2は、現存部分で厚さ2.3cm～2.6cm、復元幅13cmを測り、1と近似値を示す。凸面は、1cm当り経糸10本緯糸10本の粗い布目痕がほぼ全体に存在し、その上に縦方向（先端側から玉縁方向）のミガキを行う。凹面は縦方向（先端側から玉縁方向）のケズリが施され、コビキ痕等は認められない。端面は縦方向の細かいミガキを行い、光沢が生じる。玉縁はあまり内傾しないが1と同様とみられる。胎土には石英粒を多く含む。

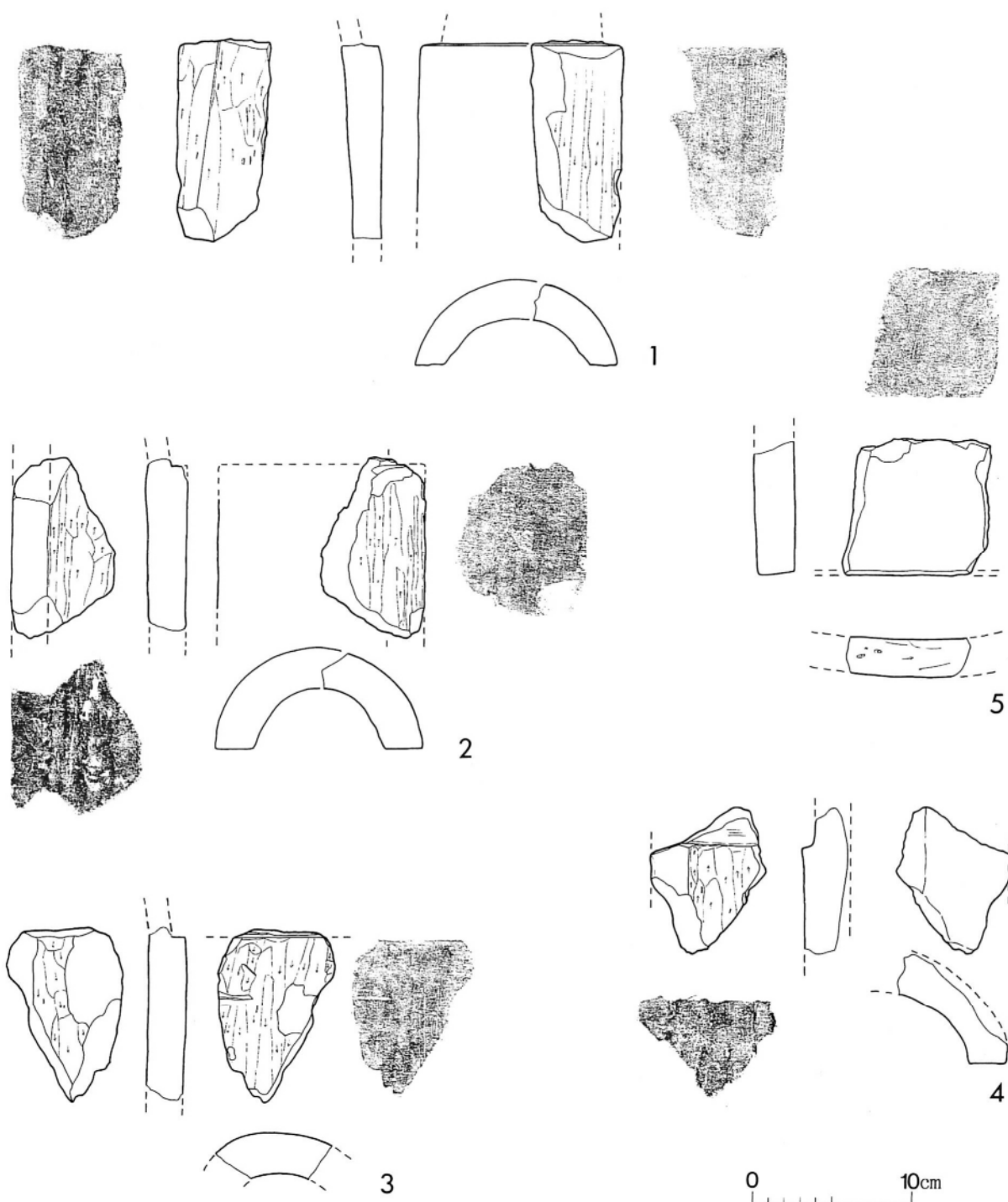
3は、現存部分で厚さ2.3cm～2.4cmを測る。焼き歪みがあり、復元幅は推定で13cmとみられる。凸面は、粗い布目痕（本数不明）の上に縦方向（玉縁側から先端方向）のミガキを行い、その後部分的に縦方向（玉縁側から先端方向）のハケメを施す。布目痕はミガキでほとんど消されている。凹面は縦方向（玉縁側から先端方向）のケズリが施され、コビキ痕等は認められない。玉縁はあまり内傾しないが1と同様とみられる。胎土には石英粒を多く含む。

特殊瓦（4） 丸瓦の玉縁付近にあたる破片であるが、凹面側に段があり、凸面側へ落ち込んでいる。幅は推定15cmで、1～3よりも一回り大きい。凸面は二次被熱により表面がほとんど剥落しており、わずかに粗い布目痕が認められる。瓦の厚さ及び調整技法は不明である。凹面は縦方向（先端側から玉縁方向）のケズリが施され、コビキ痕、布目痕、縄痕、タタキ痕等は認められない。玉縁部は有段になっており、横方向の線状痕が認められ、ナデとみられる。端面は縦方向の細かいミガキにより平滑化する。胎土には石英粒を多く含む。

平瓦（5） 端部片である。表面は風化のためかなり磨耗する。厚さは2.5cmを測る。凹面はケズリとみられる斜め方向の擦痕（線状痕）が認められる。凸面は磨耗により光沢を帯び調整は不明である。端面は右方向のケズリが行われる。胎土には石英粒を多く含む。

以上の観察から、丸瓦についてはその特徴を次のとおりまとめることができる。

- ① 玉縁は有段となる
- ② 幅は13cmで、厚さ2～2.5cm前後である
- ③ 凸面の調整は、布目痕の上を縦方向に丁寧に磨く。ハケメを加える場合がある
- ④ 凹面の調整は、縦方向のケズリを行い、コビキ痕、布目痕、縄痕等は全く残さない
- ⑤ 胎土には石英粒を多く含む



1～5 富山城本丸採集の瓦（故林寺厳州氏採集品）



6 富山城本丸採集の軒平瓦（西井龍儀氏採集品）

7 大手町出土の滴水瓦
6,7は〔西井 2001〕より

これらの瓦の年代については瓦当面の文様が不明なため決定は困難である。一方造瓦技法からみると、織豊期以降の丸瓦の凹面に特徴的なコビキ痕が本資料では意図的にケズリ取られている。このようなケズリは現在まで織豊期以降の丸瓦には確認されないこと、また有段形式の玉縁についても織豊期以降の丸瓦にはあまり認められないことの2点から、これらの瓦を織豊期より新しいものとみなし、慶長期以降に位置づける西井説は妥当と考えたい。

しかしながら慶長期以降関連の深い金沢城においては、詳細は十分把握されていないが創建瓦と考えられている一群は織豊期の造瓦技法の系譜を踏襲しているようであり、その後においても富山城型式の丸瓦は出現していない。したがってこの富山城型丸瓦は、織豊期から近世城郭成立期のいずれにあってもきわめて特殊な一群といえる。その系譜や年代の解明は今後の検討を待たねばならない。

さて、西井氏が本丸東側石垣上から採集された軒平瓦（6）は、硬質でいぶしに光沢が認められる。文様は肉厚でしっかりした均整唐草文を配する。その子葉は各々が中心飾りから派生せず、1本の連続した流れをもつことが大きな特色である。このような特徴に近い唐草文は金沢城石川門盛土3〔石川県立埋文センター1998〕に少数認められるものの、その意匠はやや異なる。これらは寛政期以前のものとされるが、富山城の唐草文はしっかりと表現され、金沢城より古い印象を受ける。

7は富山市大手町（江戸期の旧二の丸跡内）から出土した釉薬瓦（富山市郷土博物館収蔵資料）は、倒三角形の形状を呈する軒平瓦で、滴水瓦と呼ばれる形式の瓦である。この瓦は主として城郭の主要建物に葺かれるもので、国内では27の城郭で確認されている〔中井1995〕。本例は梅鉢紋が配される家紋瓦で、瓦当面がほぼ直角に接合する後出的な要素を有する。二の丸の二階櫓御門あるいは本丸関連建物に葺かれていたことが考えられる。

以上富山城出土の古相を示す瓦について林寺資料を中心に概観したが、佐々成政から前田利長の在城した天正年間後期から慶長年間にかけての時期に確実に瓦葺建物があつたかどうかは未だ不明である。今のところ、利長が行った慶長2年および慶長10年前後に行われたと推定される初期整備の際に石垣築造とともに瓦葺建物が導入されたという見方をしておきたい。

これらの瓦については先にも述べたが、造瓦技法において唯一ともいえる特殊なケズリ技法を用いている。この技法が製作の際に何らかの特殊な理由により突発的に行われたのか、あるいは富山城造瓦工人集団の特殊なクセであったのかはわからないが、富山城においては定着した技法として存在したことは確かである。この特殊なケズリ技法を施した丸瓦を「富山城型丸瓦」と呼び、近世初期頃における一指標として位置付けておきたい。

本報告にあたっては西井龍儀氏、上原真人氏、佐伯哲也氏より多くのご教示を得た。記してお礼申し上げます。

参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1998 『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書Ⅱ』
上原真人 1984 「瓦の見方について」『富山市考古資料館紀要』第3号
斉藤朝子・高尾由美子・内山久子 1996 「富山城址採集の瓦について」『富山市考古資料館紀要』第15号
富山市教育委員会 2004 『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市郷土博物館 1994 『特別展 富山城の歴史展』
西井龍儀 2001 「富山県産瓦の変遷」『北陸の瓦の歩み』（社）日本セラミックス協会北陸支部
中井 均 1995 「滴水瓦に関する一考察」『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会